インディアンの王女ポカホンタス

刈　田　元　司

1

Democracy in America の著者ドゥ・トックヴィル伯爵 (Alexis Charles Henri Maurice Clérel de Tocqueville, 1805—59) は，アメリカの南部を旅行中に目撃した事実を次のように報告している。1831年のきびしい冬，メンフィス (Memphis) のミシシッピ河河畔に立って，チョクトー族 (Choctaws) の一バンド（小集団）が住みなれた東部の土地を追われ，政府によって定められたインディアン地域に行くために，渡し場をわたって舟に乗りこむのを見た。「彼らは家族づれで，中には怪我人，病人，生まれたばかりの赤ん坊，瀕死の老人もいた。彼らはテントもなく，武器も食糧も持っていなかった。」一列になって舟に乗り込み，先祖伝来の土地を永久に離れなければならないのに，「叫び声，すすり泣きとてひとつなく……皆が皆だまりこくっていた。」この光景にドゥ・トックヴィルは深く心を動かされたが，更に深い意味を読みとった。「北米インディアンのどの部族も，対抗できない競争に敗れてしまったのだ。彼らはそれぞれが孤立し，小さなコロニーを作っているにすぎないのだ。彼らが今なお持ちつづけているのは，屈辱や敗北を無視しても道徳的秩序を維持し，人間と宇宙との調和を守ろうとする力学であった。」

最近見直されつつある大衆作家にゼーン・グレイ (Zane Grey, 1872—1939) というダイム・ノヴェル (dime-novel) の継承者がいる。13,000,000部以上売れたという彼の60冊を超える作品の中に，ナファイー・インディアン (Naphaie Indian, Navajo のこと）の悲劇的な物語を語る『消えゆくアメリカ人』(*The Vanishing American*, 1925) という小説がある。この小説のさいごの場面はインディアンの運命を暗示しているかのようであ

る,「壮麗な日没で,西の空いちめんにひろがった赤々と燃える炎がわずかに北の空に色を薄れさせていた。この壮大華麗な空を背景に,インディアンの騎馬集団が遠くに去っていこうとしていた。密集の集団あり,一列の集団あり,小さな集団,2,3人のものさえあった。金色の地平線に黒いシルエットの形となった先頭集団は,まるで美しい予言的な空の中に走りこんだかのように,消えはじめた。……さいごにただ一人きりのインディアンが暮れてゆく地平線に残された。……鞍に身をかがめた憂鬱そうな異様な姿が,沈みゆく日没を背に小さくなり,薄くなり,消えていった。」

この二つの例——第1は歴史家の,第2は小説家の見解——であるにしても,一般にアメリカ・インディアンは消えゆく民族 (vanishing people) であるかのように考えられてきた。しかし最近の研究書 (*Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups,* 1980) によれば,合衆国の領域内に,白人が到着した頃はインディアンの数は85万から100万であった。それが,1970年の国勢調査では791,839人となっている。たしかに1600年代から1800年代までは急速に減少した。1900年の調査では237,196人であったから,200年間に75%減少したことになる。しかし20世紀になると持ち直し,100%の増加をみたところをみると,やがては1600年代を上回ることになるかも知れない。

しかも,最近はアメリカの各界にインディアン出身者の活躍が目立つようになってきている。たとえば舞踊の世界ではオクラホマのオセージ保留地 (Osage reservation) 出身のバレリーナ,Tallchief sisters が——姉の Marjorie は Paris Opera Ballet に,妹の Maria は American Ballet Theater に——名をあげている。学界においては,人類学者 Edward Dozier は Santa Clara Pueblo の出身,New York's Museum of American Indian の Director である Dr. Frederick J. Dockstader は Navajo 保留地の出身である。また文学の世界においては,1969年 *House Made of Dawn* によってピュリッツァー賞を受けた Navarre Scott Momady (現在はアリゾナ大学教授) は Kiowa 族出身で,アリゾナに生まれ,南西部の Apache, Navajo, Pueblo 保留地で育った人物であり,Vine Deloria, Jr. は Sioux 族出身で,今日のアメリカ・インディアンに関する本 *Custer Died*

for Your Sins の著者として有名である。

更に先の新しい研究によれば，1970年代のアメリカ・インディアンのグループは173で，最大なのはアリゾナとニューメキシコにいるナバホ族(Navajo)の16万人，最小はカリフォーニアにいるチュマッシ(Chumash)族と，アリゾナのモドック(Modocs)族で100人以下であるという。1600年代には200以上の部族がいた。だから30%か，あるいは16%が消滅したことになる。消滅の原因は病気，白人による虐殺，他のグループによる吸収，白人との接触初期の悪環境等によるものであったであろう。

ケネディ大統領の就任式に，国民詩人といわれたロバート・フロスト(Robert Frost)が，つめたい風を頬に受けながら，「完全な賜物」(‘The Gift Outright’)という自作の詩を朗読したことは有名である。その冒頭の

‘The land was ours before we were the land’s’
（われらがこの国土のものとなる前に国土はわれらのものであった）

という一行は，アメリカ人の愛国心を鼓舞する意味をそなえているにしても，今考えてみると，あまりにも一元的，楽天的，自己中心的であるといわれても仕方のない面がある。

それはこれまでの多くのアメリカ文学史が，1607年4月のジェイムズタウン植民地，1620年12月のプリマス植民地から始まる，すなわちアングロ・サクソン民族の植民地創設から始まっていて，それ以前の先住民族や，スペイン，フランスなどのヨーロッパ先進国の植民地との抗争がほとんど無視されているからである。

2

世界史的にみて，アメリカは1492年のコロンブス発見以前にすくなくとも2度発見されている。コロンブス前の発見は，1004年頃，アイスランド人のエリクソン(Leif Erikson)がカナダ海岸に上陸し，そこが野生のブドウ，小麦の生育する温暖な気候のよい牧草地のある土地であると報告し，そこをVinlandあるいはVine Land（ブドウの国）と名づけた。またアイスランドからの難民たちがカナダからデイヴィス海峡(Davis Strait)

をへだてたグリーンランドにコロニーをつくり，古い物語によれば，彼らは400年間にわたって，アメリカの沿岸やノヴァスコシア (Nova Scotia) や，更に南の方まで探検していたようである。この二つの植民地には白造りの家屋，教会，牧場があり，しだいに寒冷となった1400年代まで生き残った。しかしたぶんベオトゥク (Beothuk Indians) 族らしい弓矢，丸木舟，乾燥肉を持つ原住民のために滅ぼされてしまった (Ruth M. Underhill, *Red Man's America: A History of Indians in the United States,* 1971 による)。

それ以前の最初の発見者は，コロンブスが誤って呼んだために「インディアンズ」といわれる種族で，シベリアからアラスカを通って渡ってきた東洋人であった。最近の調査によると，シベリアとアラスカは遠い過去において数回連結したことがあるらしい。紀元前35,000—11,000のあいだに両大陸はほとんど1,000マイルもの長さがツンドラでつながったことがある。紀元前12,000年から15,000年にわたってベーリング海峡を通って，マンモス（巨象）や大野牛などの豊富な狩猟のできる土地を探して南下した移民たちは，背の高いもの，低いもの，長頭のもの，円頭のもの，雑多ではあったが，蒙古系の人種が多かった。大体においてあごひげが少なく，髪の毛は黒くて真直ぐ，目は長目で少々斜視気味，頬骨は高く，顔は広い。皮膚の色は黄色がかった象牙色が典型的であった。

約15,000年のあいだにさまざまな種族が新世界に来たことは，彼らの話す言葉が部族ごとに異なっていることによっても明白で，インディアンの中に暮らす白人に “Do you speak Indian ?” とたずねるのは，“Do you speak European ?” とたずねるのと同じ愚問であるという歴史家もいる (*cf.* Oliver La Farge, *A Pictorial History of the American Indian,* 1956, p. 12)。はっきりしているのは，アメリカ・インディアンが単一の民族ではなく，多様な民族であるということである。

さて，ポカホンタス (Pocahontas) というアメリカ・インディアンの女性は，アメリカ女性史の最初にあらわれる名前で，アメリカ史やアメリカ文学史を読む者にとってはなじみの深い名である。ヴァージニアのジェイムズタウン (Jamestown) に植民した指導者の一人ジョン・スミス (Cap-

tain John Smith) がパウハタン族 (Powhattans) に捕えられ，まさに根棒で頭を割られそうになったとき，パウハタン王の 12，3 歳の娘ポカホンタスが身を挺して彼の命乞いをしたために，一命を救われ，これが機縁となってパウハタン族とジェイムズタウンとりでとの関係が親密となった。やがて彼女はキリスト教に改宗し，ジョン・ロルフ (John Rolfe) と結婚し，更に英国にもわたって女王に謁見したという物語はあまりにも有名である。

この旧大陸と新大陸の文字通りの掛け橋となったポカホンタスは，半ば伝説化され，18 世紀末から 20 世紀の初頭にかけて，主として大衆娯楽の作家たちによって，小説，劇にされた。ことに劇は初期の大衆文化の代表であったので，James Nelson Barker (1754—1812) の *Indian Princess; or, La Bell Savage* (1808) というオペラ風 3 幕のメロドラマがフィラデルフィアにおいて成功を収めて以来，1830 — 1850 年のわずか 20 年間に，この 'Noble Savage' を賛美する少なくとも 40 篇の劇が舞台にかけられたという (Frances Mossiker, *Pocahontas,* 1976, p. 325)。

これが小説になると，想像力の飛躍はいっそうはげしく，彼女を主人公にした小説には，船員あがりの John Davis (1775—1854) の *The First Settlers of Virginia* (1805) のほか多数あるが，John Esten Cook (1830—86) の *My Lady Pokahontas* (1885) などは現在もなお伝奇物語として読める作品である。英国にわたったポカホンタスがスミスとの悲しい再会をしたり，シェイクスピアが友人となったスミスから聞いた物語を土台にして書いた *The Tempest* を Globe 座で見て，Miranda が自分で，Ferdinand がスミスであると考えたとしたり，ジョン・ロルフを詐術にたけたピューリタンの偽善者ときめつけたりするような，事実から大きく離れたロマンスに仕立てている。

数奇な生涯を送った「純真な自然の子」，「森の乙女」ポカホンタスの物語が英本国においても興味のある話題にされたことは当然で，たとえば一流の小説家 W. M. Thackeray でさえも *The Virginian* (1859) の中の一人物に次のようなバラッドを書かせている。

From the throng, with sudden start,
See there springs an Indian maid,
Quik she stands before the knight,
"Loose the chain, unbind the ring,
    I am daughter of the king,
    And I claim the Indian right!"
    ....
In the woods of Powhatan,
Still 'tis told by Indian fires,
How a daughter of their sires.
Saved the captive Englishman.

(まわりの群集から，とつぜん，見よ，ひとりのインディアン娘が立ちあがり，急ぎ騎士の前に立ち，「鎖をゆるめ，輪をはずせ。わたしは王の娘，正当の権利を主張する。」……パウハタンの森では今でも焚火のそばで語られている，主君の娘が捕われのイギリス人を救った話が。)

また20世紀の小説家 David Garnett (1892—1981) も *Pocahontas* (1933) を書いている。

しかし文学作品以外の児童読物，教科書，論文，雑誌記事に数えきれないくらい多くのポカホンタスが扱われていることは当然である (Mossiker, *Pocahontas,* p. 330 参照) としても，彼女が名のある詩人，小説家によって歌われ，神話的人物に祀りあげられたのは20世紀になってからで，まず詩作品では Carl Sandburg の "Cool Tombs", Vachel Lindsay の "Our Mother Pocahontas", Hart Crane の *The Bridge,* Stephen Vincent Benét の *Western Star,* Louis Simpson のピュリッツァー賞受賞の *At the End of the Open Road* (1962) 等があり，小説には Noel B. Gerson の *Daughter of Eve* (1958) のほか John Barth の *The Sot-Weed Factor* (1960) がある。これらのうち重要な作品については後述することにしたい。

3

Virginia Company が英国政府から植民の許可を取ったのは John Smith (1579 / 80—1631) が 26 歳のときで，1606 年 12 月に英国を出発，翌年 4 月 26 日に Jamestown に植民地を作った。彼には *A True Relation of Such Occurences and Accidents of Note as hath hapned in Virginia since the first planting of that Colony* (1608) をはじめ，*A Map of Virginia, with a Description of the Countrey, the Commodities, People, Government, and Religion* (1612), *A Description of New England* (1616), *New England Trials* (1620), *The Generall Historie of Virginia, New England, the Summer Isles* (1624) 等の著作がある。奇妙なことに，ポカホンタス・エピソードの出てくるのは彼女の死後に出版された *The Generall Historie* が初めてなので，このエピソードの真偽をめぐって多くの論議がなされてきていることは周知の通りである。ポカホンタス・エピソードに触れる前に，ポカホンタスの父親 King Powhattan と Captain John Smith との関係の中から重要なものを拾いだしてみよう。

私にはじめてポカホンタスに興味を抱かせた Henry Adams の論文 "Captain John Smith" (1862) (George Hochfield, ed. *The Great Secession Winter of 1860—61 and other essays of Henry Adams* に収録されている）も指摘しているように，1608 年の最初の記録に描かれたインディアンズは親切で友好的であったのに反して，*The Generall Historie* (1824) になると，"Powhattan having disguised himself in the most fearfullest manner he could…… more like a devil than a man, with some two hundred more as black as himself" (パウハタンは世にも怖ろしげな扮装をして……人間というよりは悪魔のように見えるのが，彼同様色の黒い 200 人もの部下をつれていた）となっている。スミスには少々誇張癖があるらしく，1608 年版には 8 人の護衛だったのが，1624 年版では 30 人から 40 人となり，4 人の道案内が 12 人となっている。それよりも興味があるのは，スミスの部下の 2 人，Walter Russell と Anas Todkill の書いた記録で，2 番目の *A Map of Virginia* に収められているスミスとパウハタン

の対話である。

スミス――「貴方がわれわれの食糧不足を補ってくれると約束された言葉を信じて，私は貴方の要求を充たし，また私の親愛の情を証明するために，自分の家の建築をさしおいて，貴方の家のために部下たちを派遣しました。……貴方の奇妙な要求の剣や銃については，私の手元には割愛できるものは一点もないのです。……」

パウハタン――「私に教えてくれる連中が沢山います。あなたがこの国へ来たのは交易のためではない，私たちの国を侵害し，この国を所有するためであると。今もこのようにあなた方が武装しているのを見て，誰が喜んで穀物を提供するでしょうか。この恐怖を一掃するためには，武器を船に置いてくるべきです。ここでは必要のないものですから。」

つづいて王は戦争と平和の差について話をすすめる。「私は自分の家族の死を3度見てきた。3代にわたる家族の中で生きているのは私だけだ。だから私はこの国の誰よりも平和と戦争の違いをよく知っている。しかし今，私も年老いて死期も遠くない。オピチャパム (Opichapam), オペチャンカナウ (Opechankanough), ケカタウー (Kekataugh) ほか私の2人の妹たちも同じ経験をすることになるだろう。……しかしあなた方がこの国に来たのは滅ぼすためで，国民はみな怖れている。友好的に受けとれるものを力づくで奪いとったり，あなた方に食糧を提供してあげるものを破滅させて何の利益になるのですか?」

スミスが最初の報告の中にポカホンタス・エピソードを入れなかったのは，新しい移民の導入を切望している植民地が，その President とも Governor ともいうべきスミスが捕虜となって，死の危機にさらされたという事件を公表するのは不利であると考えたからであろうか。それにしても両者に記述の不一致がある以上，歴史家としてのジョン・スミスには問題があると非難した Henry Adams の意見には妥当性がある。

これに対して別の解釈もある。これは1610年にジェイムズタウンに到着した William Strachey の手紙（のち Purchas に印刷され，シェイクスピアの *The Tempest* の資料になった），更に1611年帰英してから出版した *For the Colony of Virginia Britannia: Lawes Divine, Moral and*

Martiall (1612), *The Historie of Travaile into Virginia Britania* (1618), Queen Ann にあてたスミスの書簡などから想像できるポカホンタスとスミス2人の個人的関係が原因となっているためで，スミスのピューリタン的意識が発表を延期させたものであろう。

ポカホンタスに救出されてから，スミスは彼女の被保護者的な存在となった。1608年9月7日 Chesapeake 周辺の探険をすませて帰ったスミスは，その胆力と決断力の強さのために President に選挙された。その月の終わりに，Captain Newport があらたに80人の植民者をひきいて来た。中に初めての2人の女性もいた。これで前からの130人に加えて80人が増強されたわけである。更にパウハタンを English King の下の Emperor に任ずる戴冠式を行うようにとの命令をうけた。スミスはこの意見に賛同はしなかったが，とにかくジェイムズタウンにおける任命式にパウハタンを招待するためにスミスは小人数の部下をつれて出発した。

ポカホンタスとスミスの関係は親密になっていった。たとえば彼が Warowcomco を訪問したとき，ポカホンタスは父が不在だったためにホステス役をつとめた。余興としてみせたのは，

> 30人の少女たちが，前と後ろを緑の葉でおおっただけの姿で森からあらわれた。体全体をいろいろな色に塗っていた。おそろしげな叫び声をあげながら，焚火のまわりの人垣に入りこみ，歌ったり躍ったりした。

余興が終わると少女たちは客たちを長い小屋の中につれこみ，ことに彼のまわりに群がっていた少女たちは，体を押しつけたり，ぶらさがったりしながら，聞いている人の耳が飽きるくらい「わたしを愛してくれないの? わたしを愛してくれないの?」('Love you not me? Love you not me?) と叫んだという。

自分がいかに女にもてたかという男の自慢話はとにかく割引きして考えられがちなものだが，宗教心のつよい英国の読者がこの乱婚を示唆するような話を喜ばなかったであろうことは想像できる。彼が最初の記録の中で，女性の魅力や誘惑の姿勢を描写するのを避けたのも無理はなかったと

思われる。しかし季節が秋の収穫時であったことを考えると，少女たちのお祭りさわぎも一種の儀式であったという可能性もあり，スミスにはその理解がなかったということになる。

翌日帰ってきたパウハタンは，戴冠式をジェイムズタウンで行うという提案に強く反対し，代わりに自分のこの地で行うこと，更に王冠を受けるために膝まずくことをも拒否した。スミスとパウハタンの関係は次第に微妙になってきた。

その年の冬，植民地はまた食糧危機におそわれた。スミスと50人の部下は Warowococomo のパウハタンのもとへ，相手の必要とする物品と穀物との交換交渉に出発した。交渉は完全には成功せず，それどころかパウハタンは約束した時間にスミスたちがトウモロコシを受けとりに来た時をねらって彼らを全員殺害しようとした。ポカホンタスは，身の危険をかえりみずに，この父の陰謀を夜中にスミスに知らせ，彼らが一刻も早くこの村を立ちのくようにと警告した。このときのポカホンタスはスミスと同行してもよいという切羽つまった気持であったにちがいない。しかし彼女の期待に反してスミスはひとりで去った。

翌1609年7月初めに Captain Samuel Argall が7隻の船と500—600人から成る第3次移民団をひきいて到着した。スミスの心外だったのは，President の任務を，新任の Lord Governor of Virginia, Lord De La Warre にゆずるようにという命令であった。植民地内の緊張，インディアンとの関係の険悪化，彼自身の火薬による怪我，更にいちばん腹にすえかねた噂——ポカホンタスと結婚して彼自身が King になろうとする野望——などが重なって，スミスは英国へ帰った。

1610年に到着した William Strachey は，その *Historie* の中で，ポカホンタスが1610年にインディアンの戦士らしい Captain Kokoum と結婚したという小さな情報を伝えている。しかしこの結婚は長くはつづかなかったらしく，1613年4月には，Argall を含む植民地の首脳部はパウハタンとの闘争を止め，恒久的な和平を結ぶ手段として，ポカホンタス誘拐を計画した。娘の救済のためにパウハタンが敵対行動を中止することを期待したのである。誘拐は成功した。というよりも，ポカホンタス自身が「英国人

との交際を復活することを望んでいた」。英国人と会わなくなって3年経ってはいたが，彼女は彼らのあいだでは有名で，その名は「英国にまで広まっていた」ほどであった。小柄な彼女の姿はほとんど変わっていなかった。目尻の長いくりくりした黒い目，女らしい表情たっぷりの手。長い黒髪は背に垂れていたが，パウハタンの未婚の慣わしとして額の上は短く切ってあった。しとやかで人付き合いがよく，どこから見ても王女であった (Grace Steele Woodward, *Pocahontas,* pp. 153ff.)。ポカホンタスはやがて植民地全体の期待以上の存在となった。

彼女は Marshall（式部官）Thomas Dale に保護され，ジェイムズタウンから数マイル上流に建築中の新しい町 Henrico の Rev. Alexander Whitaker の牧師館に住んだ。聖餐式その他のキリスト教の訓練を受け，英語を巧みに読み書きできるようになり，服装も英国風になった。そしてキリスト教に改宗して洗礼をうけ，Rebecca の名を得た。

彼女の変貌は更に前進した。John Rolfe (1585—1622) という妻を亡くした英国人が彼女の訓練を助けることになる。西インド諸島のタバコの耕作を実験している農園近くで，ロルフはしばしばポカホンタスに会った。ポカホンタスという名は，父親から与えられた名で，英語では「二つの丘の間の輝く小川」('Bright Stream Between Two Hills,) の意味，パウハタン語では「気まぐれ女，はしゃぎ屋」('Little Wanton'), ('frolicsome') の意味であるとされたが，彼女の部族のあいだでのみ通る隠れた名は 'Matoax or Matoaka' で，「かわいい雪白の羽」'Little Snow Feather' の意味であった。異国でその土地の女と結婚することに抵抗を感じながらも，ロルフはポカホンタスとの結婚を真剣に考えるようになった。1614年4月の結婚式前に，ロルフが植民地の総督代理たる Sir Thomas Dale にあてた手紙を読むと笑いだしたくもなる。

> "…… in the undertaking of so mightie a matter, no way led…… with the unbridled desire of carnall affection; but for the good of this plantation, for the honour of our countrie, for the glory of God, for my owne salvation, and for the converting to the true

knowledge of God and Jesus Christ, an unbeleennng creature, namely Pokahontas.

(この重大事の決行は……止めどのない肉欲愛のためではなく，この植民地の利益のため，祖国の名誉のため，神の栄光のため，私自身の救済のため，信仰薄き人間ポカホンタスを神とイエス・キリストのまことの理解に改宗させるためです) (Wilcomb E. Washburn, ed. *The Indian and the White Man*, p. 22)。

父パウハタンの許可を得た2人は，ジュイムズタウンの小さな教会で結婚式をあげた。参会者の大部分が植民の住民であったことは当然で，ポカホンタスの叔父，2人の継兄弟も加わっていた。Henriko 村近くの夫の農園における新夫婦の生活は幸福で，年の暮れには男児も出生，Thomas と名づけられた。ロルフはスミスとちがった意味において進取の気持に富んだ男で，ポカホンタスは彼に感情的喜びを与えたばかりでなく，インディアンの持つタバコ栽培の技術をも教えた。

4

ポカホンタスが当然異質の二つの文化の調停者となり，また平和の使者となったことが，このロマンスの最も重要な意義であろう。他に例をとれば，メキシコを征服したコルテス (Hernán Corités, 1485—1548) が，インディアンのアステック族 (Aztecs) を征服する際に，マヤ語とアステック語および奴隷として働いているうちに習い覚えたスペイン語をも話す語学の才能ゆたかな La Malinche（インディアンの呼び名では Malintzin）が匹敵するものとなろう (Tzvetan Todorov, *The Conquest of America*, 1984参照)。ポカホンタスが新世界の (Earthmother)「大地母神」の称号を得ているのも当然というべきかも知れない。

普通 'Earth Mother' というときは，「母なる大地，豊饒と生命の起源とされる神，地母神，大地母神」と日本語にされることが多いが，ときに語感的に「肉感的な女性」の意味に使われることもある。生めよふやせよの Earth Mother となるためには，彼女に異性をひきつける絶大な魅力がな

ければならない。

ここに興味ある４枚のポカホンタス肖像画がある。

1

2

3

4

第１は現在ワシントン市の National Gallery of Art にあるもので，たぶん彼女が 1616 — 17 年英国にいた当時の，悲劇的な死の前に無名の英国画家によって描かれたもの。第２は現在ボストンの Massachusetts Historical Society にあるもので，ボストンの若い女性のための ‘finishing school’（花嫁学校）において Bevery の Mary Woodbury（のち 1737 年３月３日 Dr. Benjamin James と結婚）によって描かれたもの。第３は 19

世紀のロマンティシズムの傾向がつよくあらわれている。Robert Matthew Sully (1803—55) によって描かれたもので，現在は Madison の State Historical Society of Wisconsin に所蔵されている。第4は Smithsonian Office of Anthropology に収めてある，1650年頃オランダか英国で描かれたらしい無名画家のもの。同じく同室にある，1836年頃 *The Indian Tribes of North America* に示された理想化された肖像画で，先の第3にやや似ているもの，また他に息子の Thomas と並んだ絵もある。

ポカホンタスの恩人である Sir Thomas Dale が5年の任期を終えて英国に帰ることになったとき，彼はジョン・ロルフ夫婦と息子トマスの同行を求め，更にインディアンの随行を求めた。パウハタンは彼の相談相手の Uttamatamakin が随行するならばと許可を出した。随行したインディアンは，英国の人口を調べるようにといわれていたので，棒に数を刻んでいったが，途中で諦めてしまったという。

Lady Robecca はロンドンを見てはげしいカルチュア・ショックを受けたに相違ない。しかも英国宮廷のさまざまな儀式や行事に出席しても威厳をくずさなかった彼女には，生得の知性を認めることができる。だが25万もの大人口をかかえている当時のロンドンの喧噪と不衛生きわまりない生活条件に対して，森林にかこまれた汚染のない新大陸から来た彼女の健康が十分に対抗できなかったことは容易に想像できる。

Queen Anne は彼女をひいきにし，King James も1616—17年のクリスマス休日最終日の Twelfth night（1月6日）には masque に招待された。ポカホンタスは随行の Uttamatamakin と共に貴賓席に座った。彼女は舞踊会，マスク，公式訪問などを大いに楽しんだ。しかし休暇あけに彼女は健康を害し，良人の田舎の Brentford に引きこんだ。ここで予期しない事件が起こった。例のジョン・スミスが友人たちをつれて訪問してきたのである。多忙のためにもっと早く訪ねられなかったのだという彼の弁解は別として，彼女にとって特別の人であったと想像される，しかも死んだと思っていた人が突然あらわれたのであるから，彼女が茫然自失して，1，2日ほど床に伏してしまったという噂も無理からぬことのように思われる。

ロルフは一日も早く家族をジェイムズ川畔の農園に連れて帰ろうとした。息子のトマスも2歳になっていた。3月の第2週目に Captain Samuel Argall の George 号にのってロンドンから25マイルほど離れた Gravesan に着いたとき，彼女の健康は悪化し，医者の診察も受けたが，近くの小屋で息を引きとったという。肺炎か結核のためだったらしい。死を前にしての勇気，ストイシズム，決意はポカホンタスの部族の特性で，彼らにとって「死を怖れるのは恥辱」であった。死の床で彼女は悲嘆に暮れる夫に「人はみな死なねばならないのです……子供が生きているだけでも十分ではないですか」とはげましたという。1616年3月21日（旧暦），水際近くに立つ古い教会 St. George's Parish Church に彼女の遺体は埋葬された。20歳であった。そしてこの世紀の終わりには，多くの歴史家によってポカホンタスはアメリカ史の最初のヒロインに祀りあげられようとしていた。

ロルフはトマスを兄に託してヴァージニアにもどった。成人するまで英国で育ったトマスは植民地に帰り，遺産を要求して，大農園の持主となった。トマス・ロルフは Jane Poythress と結婚し，ポカホンタスの血は，Randolphs, Eldridges, Tuckers, Bollings, 家等，ヴァージニアの著名な家係につたわり，Woodrow Wilson の2度目の夫人 Edith Galt Bolling もこれらの家系の中に含まれているのである（Anne Voth, *Women in the New Eden,* 1983, p. 30）。

5

未開と文明，無垢と知恵，粗野と洗練，西半球と東半球，侵略と敗北，誘拐と身代金の要求，死の危険と救出，恋愛と結婚，異教徒からキリスト教徒へ，荒野と大都会，それぞれ対立する概会の衝突と和解など，およそロマンスの必須の条件と考えられ得るものが，すべて一人の女性の短い一生の中に圧縮され，具現化されていることを考えると，このポカホンタスという女性がただ単に歴史上存在した人物としてだけでなく，やがて神話的な女性となり，多くのロマンスの主人公として取りあげられるようになったのは当然といってもよいであろう。

20世紀の詩人 William Carlos Williams は彼の著書 *In the American Grain* (1925) の中で, “I do believe the average American to be an Indian, but an Indian robbed of his world — unless we call machines a forest of themslves” (わたしの考えでは, 普通のアメリカ人はインディアンである。ただし——機械を何らかの森林と呼ばないかぎり——自分の世界をうばわれたインディアンであると思う) と言っているが, 自己の主体性を求めて, ヨーロッパ文明の中に探求の旅に出た知識人たちとは逆に, アメリカの国土自体の中に主体性を探求しようとした1920年代の文学者の中に, 言葉のリズムと所属する場所のイメージの根源としてアメリカ・インディアンに興味を持ったばかりでなく, インディアン自体をアメリカ大陸のシンボルとして用いようとした詩人たちがあらわれたのは当然であろう。新しいアメリカのアイデンティティが国土との調和関係, 神秘的参与に基づいていると考えたからである。

ウィリアムズは Columbus, Cortés, De Soto たちの行動から叙述をはじめているが, ポカホンタス, ジョン・スミスのことは直接扱ってはいない。ただアメリカの文化的アイデンティティの問題と, 国土との関係の問題に関心を払ったこの時代の風潮を代表して, さいごにインディアンを発見したのである。*In the American Grain* は, インディアンに具現される新世界の潜在的価値を再評価することによってアメリカ史を見直そうとする彼の努力の結晶であった。彼はインディアンをアメリカの大地の精神と連結させてインディアンを賛美している。たとえば彼の代表詩集のひとつ *Spring and All* (1921) の28番の題名のない詩,

> Black-eyed susan / rich orange / round the purple core // The white daisy / is not enough // Crowds are white / as farmers / who live poorly // But you / are rich / in savagery // Arab / Indian / dark woman //

> (黒い目のスーザン/よく熟れたオレンジ/紫色の芯のまわりの//白いひなぎくは/十分ではない//群衆は白い/貧しく暮らす農民のように//だがお前は/未開の中では/富んでいる//アラブ/イン

ディアン／肌の黒い女よ／／）

この詩にあらわれる「肌の黒い女」は黒い目のスーザン，北アメリカ特有の植物である。彼女に連想されるのは，アラビア人，インディアン，未開の状態のために生活が豊かになっている土着の人である。対照的に，ヨーロッパ産のひなぎくは「十分ではない」といわれ，貧しく暮らす群衆を連想させる。この白いひなぎくは白いヨーロッパ人の意識を代表するものと考えられるし，白人はこの土地の「黒い肌の未開の精神」と接触する必要があるというウィリアムズの思想を表現している。

ポカホンタスが名のある詩人によって歌われ，神話的人物に祀りあげられたのは20世紀になってからで，Carl Sandburg は “Cool Tombs” (1946) において彼女の美をたたえ，Vachel Lindsay はサンドバークの “in the cool tombs” のリフレインをとりあげ，このテーマを拡大して，“Our Mother Pocahontas” を書いた。まずこの2人の詩人から眺めてみよう。「冷たい墓の中で」はリンカーンもグラント将軍も墓の中では，暗殺者のことも，腹心の部下や賄路のことも忘れただろうか。

> Pocahontas' body, lovely as a poplar, sweet as a red haw in November or a pawpaw in May, did she wonder ? does she remember ? in the dust, in the cool tombs ?
>
> (ハコヤナギのように愛らしく，11月のサンザシか，5月のポーポーの木のようにすてきなポカホンタスの亡きがら，冷たい墓の中で，彼女はいぶかしく思っただろうか?　彼女は思い出すだろうか?)

と書いた。

批評家の Leslie A. Fiedler は *The Return of the Vanishing American*（『消えゆくアメリカ人の帰還』1968）において，16世紀ヨーロッパの地図制作者のいだいたイメージ，すなわち根棒をふりあげて男の首を切り離した恐ろしい「インディアンの王女」の危険な像が，ジョン・スミス＝ポカホンタス物語によって，若い愛すべき「インディアンの王女」に和らげられたことを説明しているが（同書 pp. 64–75)，フィードラーもいうよう

に，この「インディアンの王女」ポカホンタスは伝統的に「荒野との和解」のシンボルであった。しかしこのようなポカホンタスを「われらが母」とし，彼女をヨーロッパの遺産を拒絶したアメリカをあらわすものとしたのはヴェイチェル・リンゼイであった。*"Our Mother Pocahontas"* がその詩である。アメリカの各地を，ことにかって野牛のあとを追って生活したインディアンの主として住んだ中西部や南部を，自作の詩を朗読旅行したリンゼイにとって，個人と土地とのギャップを何とかしてつなぎたいという切望から，歴史的な事実をも歪曲したのであろう。

> The Forest, arching low and wide / Gloried in its Indian bride… John Rolfe is not our ancestor. / We rise from out the soul of her / Held in natural wonderland, / While the sun's rays kissed her hand, / In the springtime, / In Virginia, / Our Mother, Pocahontas. //
>
> (森は低く広くひろがり，そのインディアンの花嫁を誇りとした。……ジョン・ロルフはわれらの祖先ではない。われらはこのすばらしいふるさとに抱かれた彼女の魂から生まれたのだ。太陽の光が，春，ヴァージニアで，われらが母ポカホンタスの手に口づけしていた。)

そして詩のさいごで，リンゼイは，アメリカの将来がポカホンタスの肉体と精神およびアメリカの大地と調和的に結ばれた新しい市民の中に具現されることを希望しているのである。

Hart Crane もまた，リンゼイと同じく，インディアンをこの国土および新しいアメリカの主体性と結びつくシンボルとして用いた。しかしリンゼイのように「ドアの掛け金をはずして純インディアンの世界に入りこむこと」は簡単にはできなかった。彼の *The Bridge* (1930) は「空間と知識の征服を記録し……時間と空間にまたがって……意識と知識と精神的統一のシンボル」となることをねがったものであった。つまりアメリカの主体像を描こうとする意図から書かれたものである。したがって空間と混沌の征服者としてコロンブスからはじまって，アメリカ本来の肉体——繁殖力——としてのポカホンタス，精神的主体としてのホイットマンを描いてゆ

く。堕落した醜悪な現在を匡正するためにはどうしてもポカホンタスとホイットマンの過去までさかのぼらなければならないと考えたのであるが，彼に一番影響を与えたのはウィリアムズの *In the American Grain* のほか，D. H. Lawrence の *Studies in Classic American Literature* の中の Cooper を論ずる 2 章であった。

たとえば，

「赤いインディアンが広大なアメリカ全土を所有するようなことはないだろう。……だが彼らの亡霊はそうするだろう。赤いインディアンは白人を憎みながら死んだ。生き残ったインディアンは白人を憎みながら生きている。」

(D. H. Lawrance, *Studies in Classic American Literature.* The New Adelphi Library, 1933, p. 39).

ハート・クレインはパトロンの Otto Kahn にあてた手紙の中で「大陸ないし大地の肉体をあらわすために選ばれた精神的な大自然のシンボルとしてポカホンタスを描いた」といっている。しかし *The Bridge* の第 2 部 “Powhattan's Daughter” の中の “The Dance” にある。

Mythical brows we saw retiring — loth, / Disturbed and destined, into denser green, / Greeting they sped us, on the arrow's oath: / Now lie incorrigibly what years between … // There was a bed of leaves, and broken play; / There was a veil upon you, Pocahontas, bride — / O Princess whose brown lap was virgin May; / And bridal flanks and eyes hid tawny pride. //

(神秘的な額が恥じらいながら，心みだれて，運命のままに，一段と濃い緑の中へ退いていくのを見た。急ぎ過ぎながら，弓矢に誓って，挨拶した。今や如何ともしがたい歳月のへだたり，木の葉の寝床ととぎれとぎれのたわむれがあり，花嫁のポカホンタスよ，お前にベールがかかっていた。おお王女よ，そのトビ色のひざは生娘の五月，その花嫁の脇腹と目には朽葉色の誇りがかくされていた。)

この捕えどころのないポカホンタス像はさいごまで続き，この詩全体の意

味もつかまえにくくなっている。

つづいて Stephen Vincent Benét の死後出版された叙事詩 *Western Star* (1943) もあるが，これ以上に興味ある Louis Simpson (1923—　) の Pulitzer 賞を得た詩集 *At the End of the Open Road* (1963) を紹介してみよう。Columbia 大学で Ph. D. を得て，Berkeley の大学，New York の State University で1967年以来教えているジャマイカ生まれのこの詩人には6冊の詩集があるが，受賞した詩集の中の "The Marriage of Pocahontas" 278行が最も新しいポカホンタス像を示しているということができよう。

> These episodes are taken / From Captain, sometimes Governor, John Smith's / Generall Historie of Virginia, / New England, and the Summer Isles. // (ll. 1—4)
>
> (次のさまざまなエピソードの出典は，キャプテン，ときに知事の，ジョン・スミスの「ヴァージニア，ニューイングランド，サマー諸島の歴史」である。)
>
> How far he tells the truth, / Seeing that he was baiting hooks / To catch investors, / I leave to the reader's judgment. / This, for example, / From his epistle to a duchess, / To my mind shows a theatrical / Extravagant spirit: // (ll. 5—12)
>
> (彼の話がどこまで本当か，彼が投資家を捕えるために釣針を仕かけていたことを考えると，読者の判断にゆだねたい。たとえば，ある公爵夫人にあてた次の書簡など，わたしには大向うをうならせようとする芝居心だと思われてならない。)
>
> So then, this is the story / Of Smith's extremities / And King Powhattan and his dearest daughter. // (ll. 30—32)
>
> (されば，これから語るのが，追いつめられたスミスとパウハタン王と王の最愛の娘の話である。)

以下8部に分かれて，

1. *Pocahontas Saves His Life*（ポカホンタス彼の命を助ける）から物語詩ははじまる。スミスが並べられた石の上に頭を押しつけられ，王の部下たちが正に根棒を打ちおろして彼の脳味噌をくだこうとしたとき，「王の最愛の娘ポカホンタスは，いかなる懇願も甲斐なしと知るや，彼の頭を両の腕にかかえこみ，自分の頭を相手の頭にのせ，彼の命を助けようとした」(ll. 66—69)。

「仕方なく皇帝も妥協し，自分のためには手斧を，娘のために鈴とビーズと銅の鍋をつくらせることにした」(ll.70—72)。

2. は *Savage Entertainment*（蛮人の余興），

3. は *A Dialogne of Peace and War*（平和と戦争についての対話）となる。

> "I know the difference of peace and war, / But now I am old and ere long must die. / What will it avail you to take by force / What you may quickly have by love ? // (ll. 124—27)
>
> (わたしは平和と戦争のちがいを知っている。しかし今わたしは年老いて間もなく死なねばならない。君たちは愛によってたやすく入手できるものを，力づくで手に入れて，何の役に立つのか?)

つづいて，4. *Pocahontas Reveals a Plot*（ポカホンタス陰謀を暴露する)。

5. *She is Betrayed and Captured*（彼女は裏をかかれて捕えられる)。

6. *Her Wedding*（彼女の結婚）は誠実な紳士である Master John Rolfe との結婚の模様をしるしている。

7. *Powhattan Laughs*（パウハタン大いに笑う）は，国王がわたし（スミス）にタバコのパイプをくれて，Sir Thomas Dale および娘とまだ見ぬ息子の消息をたずね，皆が元気で満ち足りた生活をしていることを知ると，娘とはもう一緒に生活はできないだろうと言いながら，大笑した。

さいごの 8. *A Dream in the Wood of Virginia*（ヴァージニアの森の中で詩人の見た夢）にいたると，「わたしは森の中で夢を見た，月がこうこうと輝き，女がひとり銀一色につつまれて立っているのを。角笛と弓と矢を

手に持ち，カワウソの毛皮を着た女性が，「わたしを愛さないの?」と歌っていた——わたしは愛さない。」数枚の緑の葉のほかは何も身につけないその風習を捨てなさい，またイワダヌキがあそぶ場所に待ち伏せすることも。スカートとフードを身につけ，事情によってはイギリスの紳士と結婚しなさい。イギリス人にならなくとも，あなたの良さは変わらない」(ll. 255—66)。

「わたしが旅に出たときは，真夏であったのに，今は寒く，地面には雪がつもっている。わたしは，パウハタンが部下の勇士たちを足もとの壁ぎわに二列に並ばせて座っている大きな館（やかた）に来た。」(ll. 267—72)。

> I spoke. They seemed to hear. / They did not speak or move. / Then suddenly they shouted // And a wind / Rushed through the hall, the torches guttered out, / And the night was filled with sound. // (ll. 273—78)。
>
> (わたしは話しかけた。彼らは聞いてくれたようだ。だが誰ひとり口もきかず，身うごきもしなかった。とつぜん皆が叫んだ。一陣の風が館を吹きぬけ，たいまつが消えた。そして夜が風の音にみたされた。)

現在のアメリカ詩の特徴である平易な用語をなだらかに駆使しながら歌われた歴史的な事件が，こうして神話に形を変えたことがよく了解される。

6

現代の著名な文学者の中から，まず詩人のシンプスンを選んだので，次に小説家 John Barth (1930—　) のブラック・ユーモアの傑作 *The Sot-Weed Factor*（『酔いどれ草の仲買人』1956—59）を考えてみよう。

このいわばバーレスクの大歴史小説の主人公は Ebenezer Cooke (1672—1732) というイギリス人で，父からゆずられたメアリランドを自分の目で確かめるために訪れて観察した意見を書きとめた皮肉な長詩 *The Sot-Weed Factor, or, A Voyage to Maryland* (1708) を基にした波瀾万丈の半生記で，猥雑な現代版のドンキホーテ物語といってもよいような作品であ

る。著者自身はこの作品を「笑劇小説」('farcical novel') と呼んでいる。あるいは「悪漢小説仕立てのこの哲学的狂騒劇」('philosophical picaresque extravaganza'), または「観念小説的茶番劇」('ideological farce') と呼んでいる。得体の知れない善人，悪人群の中心に純真無垢の間抜けな主人公エベニザーを置いて，彼らの経歴や冒険を語る方法は，ピカレスク・ノヴェルからホメロスの『オデュッセイア』にいたる西欧のロマンの伝統を彷彿とさせるものがある。アメリカを無垢の処女地 ('Virgin land') と考えて，そこにヨーロッパ的な国造りを考えたイギリス人の思いあがりが「無垢」('innocence') から「経験」('experience') の過程を経て，普通の予想をこえた結末へと向かうのであるが，当然のように，先住民族インディアンの王国の話も物語られる。

メアリランドの叙事詩を書きたいという熱望に燃える主人公エベニザー・クックは，さいごに『酔いどれ草の仲買人』(*The Sot-Weed Factor, or, A Voyage to Maryland,* 1708) という長篇詩を書いたが，執筆の前にまず *The Privie Journall of Sir Henry Burlingame* を読んだ。そこに記されている事実は，ジョン・スミスの *Generall Historie* に書かれていたもので，彼が　パウハタンの王国に入って捕えられ，生命の危険にさらされたときに，王女ポカホンタスの助命嘆願に助けられたいきさつが書きしるされていた (*The Sot-Weed Factor,* Bantam Books, pp. 162—69)。しかし，スミスが許されたについては，彼とパウハタン王とのあいだに驚くべき裏取引があったことを，さいごに陽の目を見ることになるスミスの *Secret Historie of the Voiage Up the Bay of Chesapeake* によって明らかにされる。その私記によれば，彼は "was pledged to gamble their lives against his ability to do what the ablest young men of the town had found impossible; relieve Pocahontas of her maidenhood" (Bantam Books, p. 791) (「部落きっての逞しい若者といえども遂に果たすことのできなかったことに敢えて挑んで，その成否に彼ら二人［スミスと同僚］の命を賭けるという約定がすでにできておったのである——すなわち，ポカホンタスの歓びを閉しているその処女の扉を押し開けてやるということであった」。——野崎孝氏訳『バースⅡ』p. 417)。

現在ジョンズ・ホプキンズ大学の英文学および創作指導の教授でもある作家ジョン・バースの才筆を見るために，17世紀の英文を模して書かれたスミスの私記を少し紹介してみよう。

> “Round about the court-yard, in a circle, stood the people of the towne, hollowing & howling in a fearsome manner. … In the center of this smalle ring sat the Emperour Powhatan … and before him, upon a manner of altar stone, lay Pocahontas, stript & trust with throngs of hyde for the heethenish rites. Yet maugre the rudenesse of her position, the Princess seem’d not a bit alarm’d, but wore an huge smyle upon her face. Whereat I guess’d that this vile manner of presenting maidens for betrothal must be in common use among the Salvage nations … We were fetch’d into the small circle and station’d before the altar of *Venns.* (*to look* whereon brought the blush to my cheeks).
>
> (Bantam Books, pp. 793—94)

> (広場の周りには，部落の者ども円陣を作りて立ち並び，口口に喚き叫ぶそのさますさまじく，……この小さき輪の中央には，国王パウハタンの坐せる姿あり……王の前には，祭壇の如き形の岩をしつらえ，その上にポカホンタスは，邪教の祭式に見るが如く，獣皮の紐に縛られし裸身を横たえてありぬ。されど，見るも無残なる姿にありながらも，王女は寸毫の恐怖だに抱かざるものの如く，面（おもて）には艶やかなる笑みさえ浮かべしその様より察するに，娘の婚約を取り結ぶための世にも厭わしきこの形は，蛮族の国の通例と思考せざるべからず……われわれ両名は小さき輪の中に導かれ，ヴィーナスの祭壇の前に据えられたり，(それを眼にしたとたん，予が頬は赤く染まりぬ)。(野崎氏訳，pp. 473—74)。

衆人環視の中で破花の儀式をおこなったスミスは前出の手記によれば，前夜おのが一物にアメリカ大茄子を用いて苦心の秘技を加えたために，王女を悶絶させるほどの首尾を収め，おかげでポカホンタスの恋慕を大いに誘ったという。

小説のこの部分が，しかし，Frederick R. Karl 教授の指摘のように，“It is one of the weakest elements in the novel, and some of the ploys are extended sophomoric jokes”(「この作品の中でも最も見劣りのする箇所で，いくつかの悪ふざけは大学2年生程度のものにすぎない」) (Frederick R. Karl, *American Fictions 1940—1980,* p. 470) と見られることは確かである。だが，バーレスク気味の技法は別として，観念的には，Leslie A. Fiedler 教授の言った

> “What Barth has finally created is, however, more than a pornographic joke; it is a counter-parable, an anti-stereotype of our beginnings in Virginia, in which Pocahotas' relationship to John Smith is portrayed not as an act of pure altruism and pity, but a sexual encounter so mechanical, so bestial, that it seems an assault other than an act of love —— and, therefore, a truer metaphor of our actual relations with the Indians than the pretty story so long celebrated in sentimental verse.
>
> (「バースが最終的に創造したものは，ポルノまがいの笑い話以上のものである。つまりヴァージニアにおけるわれわれの起源に関する寓話の裏返しであり，固定観念に反対するものであって，そこではジョン・スミスに対するポカホンタスの関係が，純粋な利他主義と憐愍の情を示す行為としてではなくて，読者には愛の行為というよりも凌辱と思えるほど，きわめて機械的，野獣的な交合として描かれている——そしてそれ故に，これまで長いあいだ感傷的な韻文で讃えられてきたあの可憐な話よりは，われわれのインディアンと現実の関係を示すより真実な陰喩となっているのである。」)
> (Leslie A. Fiedler, *The Return of the Vanishing American,* 1959, p. 152)

という意見に耳をかたむける必要がある。

ジョン・バースが意図したのは，新世界と旧世界を地理的にも種族的にも思想的にも宗教的にも結びつける象徴としてのポカホンタス神話を，ただ単に表層的に眺めることをいさぎよしとせずに，これまでのさまざまな

技法を駆使して神話を笑いのたねとしたかったのであろう。

60年代の詩人シンプスンのようにこの神話を肯定的に見るか，70年代の小説家バースのように否定的に見るか，それは見る人の文学観と姿勢によって異なるのは当然であろう。しかし文学史的に見ると，第1次大戦，第2次大戦後に顕著にあらわれた「アメリカ人とは何か?」「アメリカ人のアメリカ性とは何か?」という自己反省と観照から来たのではないかと思う。

（注）本稿は本年（1984年）10月7日盛岡大学の東北英文学会第39回大会においておこなった特別講演に大きく加筆したものである。

Bibliography

Barth, John. *The Sot-Weed Factor.* 1960, Bantam ed., 1969
野崎孝訳「酔いどれ草の仲買人」2巻，集英社，1979。

Billard, Jules B., ed. *The World of the American Indian.* National Geographic Society, 1974.

Bishop, Ferman. *Henry Adams,* Twayne's U. S. Authors Series, 1976.

Castro, Michael. *Interpreting the Indian: Twentieth Century Poets and the Native American.* Alburquerque: University of New Mexico Press, 1983.

Cooke, John Esten. *My Lady Pokahontas: A True Relation of Virginia, Writ by Anas Todkill, Puritan and Pilgrim.* N. J.: The Gregg Press. 1968.

De Tocqueville, Alexis. *Journey to America.* Translated by Geoge Lawrence. New Haven: Yale University Press, 1962.

Dialogue, "The American Indians". Vol. 6. No.2, 1973, U. S. Information Agency.

Davis, Christopher. *North American Indian.* London: The Hamlyn Publishing Group Limited, 1969.

Emerson, Everett H. *Captain John Smith.* Twayne's U. S. Authors Series, 1971.

Fiedler, Leslie A. *The Return of the Vanishing American.* New York: Stein and Day, 1969.
渥美昭夫・酒本雅之訳「消えゆくアメリカ人の帰還」新潮社，昭和47年

Hagan, William. *American Indians.* The Chicago History of American Civilization. The University of Chicago Press, 1961.

Hassrick, Royal B. *The Colorful Story of North American Indians.* Octopus Books Limited, 1974.

Hochfield,George, ed. *The Great Secession Winter of 1860—61 and other essays by Henry Adams.* New York: Sagamore Press, Inc., 1958.

Karl, Frederick R. *American Fictions 1940—1980: A Comprehensive Historiy and critical Evaluation,* New York: Harper & Row, Publishers, 1983.

La Farge, Oliver. *A Pictorial History of the American Indian.* New York: Crown Publishers, Inc., 1956.

Mossiker, Frances. *Pocahontas: The Life and the Legend.* New York: Alfred A. Knopf, 1976.

Radzinowicz, Mary Ann, ed. *American Colonial Prose: John Smith to Thomas Jefferson.* Cambridge University Press, 1984.

Simpson, Louis. *At the End of the Open Road.* Middletown: Wesleyan University Press, 1963.

Still, Bayard, ed. *The West: Contemporary Records of America's Expansion Across the Continent: 1607—1890.* New York: Capricorn Books, 1961.

Stoutenburgh, John, Jr. *Dictionary of the American Indian.* New York: Philosophical Library, 1960.

Thernstrum, Stephan, ed. *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups.* Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1980.

Tunis, Edwin. *Indians.* Cleveland and New York: The Wald Publishing Company, 1959.

Underhill, Ruth M. *Red Man's America: A History of Indians in the United States.* Chicago: The University of Chicago Press, 1953, Rev. 1971.

Voth Anne. *Women in the New Eden.* Washington, D. C. :University Press of America, Inc., 1983.

Washburn, Wilcomb E., ed. *The Indian and the White Man.* Documents in American Civilization Series, Anchor Books. Doubleday & Company, Inc., 1966.

Wissler, Clark. *Indians of the United States.* Anchor Books. Doubleday & Company, Inc., 1966.

Woodward, Grace Steel. *Pocahontas.* The Civilization of the American Indian Series. Norman: University of Oklahoma Press, 1976.

金関寿夫「アメリカ・インディアンの詩」中公新書 472, 1977 (昭和 52)。

「宝島」 アメリカ・インディアン特集 第6巻2号, JICC 出版局, 昭和 53。

Indian Princess Pocahontas

MOTOSHI KARITA

Summary: — Indian Princess Pocahontas was a daughter of King Powhatan and her relation with Captain John Smith has been so often discussed and talked of among historians and romancers that she has been regarded not only as the firsht woman in the history of the United States but has become a heroine of many dramas and novels in the nineteenth century.

But since the turn of the century, especially during and after the World War I, poets such as William Carlos Williams, Carl Sandburg, Vached Lindsay and Hard Crane, looked Pocahontas as the origin of Americans or as The Earth Mother; she was taken not as a historical figure bus as a mythical lady. And after the World War II, the Pulitzer Prize winner poet Louis Simpson portrayed a new princess Pocahontas in his *At the End of the Open Road,* and the novelish John Barth showed us a quite different princess in his farcical, picaresque and black humored novel *The Sot-Weed Factor.*